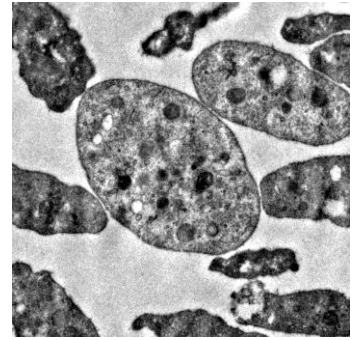


血栓症

人類の進化の過程は出血との戦いでもありました。その過程で我々はオーバースペックともいえる高度な止血・凝固能を獲得してきましたが、事故にでも遭わない限り出血の危険に晒されることがない現代の社会では、その高い止血能がむしろ仇となり血栓症を招くことがあります。当科は初代教授・岡村孝先生のご専門が凝固・線溶異常であったこともあり、造血器悪性腫瘍のみならず、血栓症の臨床にも豊富な経験を有しています。臨床的に血栓症が疑われる、あるいは血液凝固系検査で異常を認めた場合には是非当科にご紹介下さい。



血栓症の原因

血液が固まらないようにする働きをもつタンパク質（凝固阻止因子といいます）の量が生まれつき少ない、あるいは働きが悪い場合に血栓症が起こりやすくなります。また、血管の内側を覆っている血管内皮細胞にも血液が固まらないようにする働きがあり、動脈硬化や血管炎などにより内皮細胞が障害されると血栓ができやすくなります。病気で長期間ベッドの上で横になっている状態や、車や飛行機の中で長時間同じ姿勢でいる状態では血液の流れが滞るため、血が固まりやすくなります（いわゆるエコノミークラス症候群）。経口避妊薬の内服、抗リン脂質抗体症候群などの自己免疫疾患も血栓症の原因になります。

血栓症の症状

血栓ができる場所によって症状が異なります。最も多いのは足の太い静脈の血栓（下肢深部静脈血栓症）で、足のむくみ、痛みといった症状が現れます。また足の血栓の一部がちぎれ、血液の流れに乗って肺に運ばれ、肺の血管を詰まらせてしまうことがあります（肺血栓塞栓症）、胸の痛みや呼吸困難が起こります。

血栓症の治療

血管の中の詰まりを取り除くため、血栓を溶かす薬の投与や外科的手術が行われます。新たな血栓ができないように血液を固まりにくくする薬（ワーファリンなどの抗凝固剤、アスピリンなどの抗血小板剤）も使用されます。血栓症の原因となる別の病気（基礎疾患）がある場合にはその病気に対する治療も必要です。